

シベリアの大空に本影錐が走った。

武者小路 知行

今回の日食が陸上を通るのはフィンランドと東シベリアであることから、当然シベリアには入れないだろうから(日食情報1982年No2のP5にも「8年後のこととはいえ、ソ連の国情を考えると外国人がこの地域に入れるかどうかはむずかしいかも知れない。」とある)、当初観測はフィンランドに限られると考えられていた。だからといって簡単にはあきらめないのが日食病患者、行けそうにない所に行つてこそ日食観測のしがいもあると、一昨年の10月に森友和氏がシベリアでの日食観測を計画し旅行社数社に当たったところ、いくつかの旅行社からはほとんど門前払い同様の対応であったが(入れることが得てから同様のツアーを募集したつもりで)、コスモトラベルがこの企画をツアーとして募集するというのでソ連との交渉に入った。近年のパレストロイカもあり、また各自治体にとっても独立採算制度の導入ということで、外国人観測隊の受け入れが外貨獲得のチャンスということもあってか交渉も比較的スムーズに進み、天文学的な条件に加え気象条件も考えて東シベリアコリマ河流域を観測地とすることになった。

昨年の夏受け入れの可能性が高くなってから、森氏より呼び掛けがありこれに応じた十数名によって『北極圏シベリア日食観測会議』が結成された。当初は「皆既帯に入れないかもしれない」という不安を持ちながらの計画であり、東シベリアの辺地であることから宿舎もないのでテント生活になる、夏は蚊が異常に多く場合によっては一人当たり数百～数千匹もたかってくる、食事もまともなものはない等最悪の条件のなかで(もちろんそんなことではめげるはずも無い面々である)『日食会議』のミーティングを重ね、観測地はチェルスキー(人口6000人程度のこの地で決まり)と決まり、一般にも募集の広告がなされた。ツアーはAコース(8日間)・Bコース(5日間)各100名募集ということであったが、シベリアの辺地前述の悪条件もあるので、両コース合わせて4～50名の応募があればと思っていたところ、近年の日食ブーム?の影響からか、はたまたシベリアの辺地の魅力であったかAコース83名・Bコース40名、上は91才から下は10才までの計123名がチェルスキーをめざすことになった。なお、宿舎については建設中のアパートを7月までに完成させて、観測にきた外国人の宿舎にあてるとということが4月に確認された。

我々のAコースは7月17日に新潟空港を出発ハバロフスク・イルクーツクを経てヤクーツクへ、この間市内観光・バイカル湖観光のほかハバロフスク気象台・イルクーツク太陽研究所・ヤクーツク地球物理研究所を訪問し、気象台では日食当日の予報を入手したが、それによると日本の予報では晴れ、英国の予報では曇りとのこと(こういうときは良いほうの予報を素直に信じる)。なおチェルスキーの気温は最低気温が4°最高気温が8°とのことであった。そして20日にこの日新潟を発つてきたBコースと合流し、チェルスキーはジェット機の離発着

ができないので、東シベリア海に面したペベクでプロペラ機に乗り換え21日早朝、降りしきる冷たい雨とユカギールの歓迎の踊りに迎えられチェルスキーに到着した。チェルスキー市長・当地の日食委員会委員長の出席の下で歓迎式典の後観測地の下見に、チェルスキー市内から東に7kmの南西にわずかに傾斜した山裾で、当日は付近の道路は観測の妨げにならないように封鎖されるとのことであった。

前日夜半気象状況は相変わらず思わしくないため、一度準備のためにセットした赤道儀もいつでも片付けられるようにしたままにしておく。沈まない太陽も雲の向うで見えないが十分明るいので時間の感覚がなくなっていく。そんな時『日食会議』のメンバーから声がかかり集まると、アメリカ人から飛行機による上空での観測を考えているが4席キャンセルが出たので買わないかということであったが協議の結果この申し出は受けないことにした。

日食当日になっても前日からの雨は相変わらずである。わたしは予定した観測をあきらめ、ビデオによる状況記録だけにすることにした。雨のなかほとんどの人は前日下見した観測地へ出たが、わたしを含めた数人は宿舎に残り日食を待つ。雨を避け宿舎のベランダに望遠鏡をセットする人もいたが、第一接触の後広場に出るとそこにもビニールの覆いをして望遠鏡をセットする人、一切の器材をしまったまま観望に徹する人、現地の子供たち、外国の観測隊の人とかなりの人たちが集まっている。セレストロンは水平方向を向いて子供たちが仲間をのぞいて歓声をあげている。ときどき雲を通して欠けた太陽がうつすらとではあるが姿を見せる。気温は6°程風も強く上着を必要とする。11h30m(JST)頃になると肉眼でははっきりしないもののビデオでは暗くなってきたのがわかる。地平近くの北西の空が真っ黒になるとその影が徐々に近付いてくる。ビデオで見ると11h51m00s(JST)頃が第二接触のようで、急激に暗くなっている。子供たちを始め大勢の歓声とどよめきが起こる。この時期のこの辺りの夜よりはるかに暗い。太陽はまったく姿を見せない。風雨も心なしが強くなったようだ。11h53m10s(JST)頃北西の空に明るさが戻ってくる。その明るさがぐんぐん近付いて上空を通過して行く11h53m40s(JST)一度もコロナを見せないまま皆既は終わった。明るくなりはじめた広場から三々五々人が散って行く。曇っていた所為もあるのだろうが思いの外暗くなったように感じた日食であった。観測地に行っていた人たちが宿舎に戻ってきた頃には青空も広がって、太陽は何事もなかったかのように輝いていた。はじめての日食を目指した人には残念なことではあったが、シベリアの空を横切って行く本影錐の移動はこれまでに無い見物であった。

23日青空の広がるチェルスキーを発ち、ヤクーツク・ハバロフスクを経て25日新潟空港に降り立った我々を真夏の太陽が迎えてくれた。

[蛇足]

ところで悪条件と思われていた宿舎はアパートがあり(まだペンキが塗り立てであつたりしたが)、蚊も思ったほど出ず、食事も極上とはいえなくともまずまず上の部であった。